音楽に想いをのせて

海南市立下津第二中学校 3年 森下 杏美

その演奏を聴いたとき、心が躍った。感動で胸が張り裂けそうになった。演奏終了後、会場いっぱいにあふれる拍手の中で、演奏を聴いて涙している人もいた。「音楽の力ってすごい。」私の胸は熱くなった。

これは、小学校四年生だった私が、下津第二中学校音楽部の演奏を聴いたときのことだ。舞台の上のお兄ちゃんやお姉ちゃんはとてもかっこよく、輝いて見えた。そして、私もいつか下津第二中学校音楽部の一員として、聴いている人を感動させられるような演奏を試みたいと思った。

翌年、私は初めて小学校の金管バンドに参加した。最初は全く音が出ずに苦労したが、五年生、六年生と地道に練習したことで、最後の演奏会では、自分のパートをしっかりと吹ききることができた。

演奏会が終わった後、私の父や母、地域の人たちが、「よかったよ。」「お疲れ様。」と、口々に声をかけてくれた。このとき、私は、「音楽で想いを伝えることのすばらしさ」を肌で感じ、もっと音楽に打ち込みたいと思った。来年は、いよいよ憧れた下津第二中学校音楽部に入学し、先輩たちとにぎやかに演奏ができると、期待に胸を膨らませた。

小学校を卒業し、私は下津第二中学校に入学した。部活動はもちろん、音楽部。それ以外は考えられなかった。しかし、私が入学したとき、部員はたった四名で、新入部員は私一人だけだった。総勢五名。今まで思い描いていたにぎやかな音楽部からは想像もできないくらい寂しい人数だった。それでも、先輩たちは私に優しく接してくれ、練習はとても楽しく、充実していた。人数は少なくとも、ここは私が憧れた下津第二

中学校音楽部。ここで、精一杯自分の音楽を奏でていこうと決意した。

一昨年の夏、三年生の先輩三人が引退し、部員は私と二年生の先輩一人の二人になった。二年生になった春、新入生は誰も音楽部に入学しなかった。そして、昨年の夏、たった一人の先輩が引退し、ついに、下津第二中学校音楽部員は私一人になった。

放課後、誰もいない音楽室。私一人のアルトサックスの音が寂しく響く。たった一人で、黙々と練習する日々が続いた。そんな毎日は、不安で寂しかった。辛かった。「本当に寂しい。もう一人では無理。音楽部を辞めよう。音楽を諦めよう。」涙と共に、やり場のない感情が込み上げてきた。

そんなとき、声をかけてくれたのは、音楽部の顧問の先生や、引退した先輩たちだった。先生は私に熱心な指導をしながら、いつもそばで励ましてくれた。先輩たちはときどき音楽室に足を運んで、私の練習にとことんまで付き合ってくれた。そして、「部員は一人だけど、私は決して一人ではない。音楽を通してたくさんの人たちとつながっている。」ということに気づいた。それからは、「寂しかった放課後の音楽室」は、私にとって、「音楽を通してつながった大好きな人たちとの絆を紡ぐ大切な場所」となった。

その後、私は精力的に練習に打ち込み、海南市内四校による合同演奏会では、ソロパートを担当させてもらった。ソロパートは緊張で足が震えたが、私を支えてくれた先生、先輩たちを思い出し、感謝の想いを音楽にのせて、全力で吹ききることができた。私をずっと温かく見守ってくれた両親も、笑顔で拍手を送ってくれた。「音楽を、下津第二中学校音楽部を辞めなくてよかった。」胸が熱くなり、自然と涙があふれた。

この四月、私は三年生になり、一年生が六人も入学してくれた。笑い声があふれる、活気のある音楽室が

戻ってきた。とてもうれしく、先輩として、音楽部部长として、身の引き締まる思いである。

下津第二中学校は、二年後に統合される予定であり、音楽部の歴史もあと少しで幕を閉じることになる。だからこそ、私が大好きな下津第二中学校音楽部の伝統やすばらしさを、後輩たちに惜しみなく伝えていきたい。また、私が周りの人たちに支えられたように、後輩たちをしっかりと支えていきたい。そして、支えてくれた人たちへの感謝の想いや仲間と共に演奏できる喜びを、心を込めて奏でる音楽にのせて、聴きに来てくれた人たちの心に届けていきたい。